

〈個人研究プロジェクト報告〉

「トランスレーション理論」による明治女性翻訳文学の発見

山出 裕子

はじめに

本研究（個人研究プロジェクト『明治女性翻訳文学における翻訳性と女性性』）は、明治時代という日本に新たな文化がさまざまな場面で生まれていた時代における女性文化を、「他者の視点」から検証するものである。その「他者の視点」として、本研究が注目しているのは、ポストコロニアル理論以降に、文学批評の世界で特に発達した「トランスレーション（翻訳）理論」を使った視点である¹。近年、文学の世界で注目されている、文化間、言語間にある空間に注目する視点、そこから生まれた移民文学や越境文学が、この「トランスレーション理論」から出発していることから、この理論の近年の文学における重要性は明らかである。さらに、そこから、トランスカルチャリズムやトランスナショナリズムという概念が生まれ、この1990年代に発展した文学理論の、その後の文学批評における影響の大きさを窺い知ることが出来る。

一方で、海外における日本文学研究において、明治期は特に注目されている時代であるが、日本国内外を問わず、その研究対象の中心となるのは、多くの場合男性作家の作品である。この時代は日本近代文学の『起源』ともされ、現代の日本文化を論じる際には特に重要とされる時期であるが、そこにおける女性作家の不在は、「近現代の女性文化」の不在を意味していない。ゆえに、本研究では明治期の文学を、フランスの哲学者で文芸評論家のジャック・デリダ (Jacques Derrida) の言うような「脱構築」の視点を通してみることで、この時代における女性作家の存在を明らかにしようとしている。また、その「脱構築」の視点で文学分析を行うという点で、本研究では特に、「トランスレーション理論」に注目している。なぜなら、本研究における「トランスレーション理論」は、ある言語で書かれた文学をもうひとつの言語に書き換えることを意味するのではなく、言語と言語、文化と文化の間の歪みにはまって、その重要性が評価されていなかった文学や、その作品を再評価するための視点を意味しているのである。

本研究は、こうした「他者」の視点を用いることで、明治期の日本女性文学を評価しなおす試みである。ゆえに、本年度の個人研究プロジェクトの研究報告として、本論では、この研究の中心となる翻訳理論について論じ、それを明治期の女性文学を分析する際に用いることで生じてくる、日本女性文化の新たな発見の可能性を示したい。そのため、本論では、まず、「他者」の視座で日本文学を見ることによって、ある種の「歪み」を日本文学に生じさせている、アメリカの日本文学評論家、ドナルド・キーン (Donald Keene) の論評を考察し、次に、近年特に北米で盛んに論じられる、「トランスレーション・スタディーズ」の発展の過程とその特徴を紹介したい。そうして、近年の文学理論を使って見直すことによって生じてくるであろう、明治期の女性文学の価値と、その再評価の必要性について示唆したい。

1. ドナルド・キーンと日本文学

アメリカから、他者の視点で、日本文学を研究しているドナルド・キーンは、日本文学の歴史を紹介するための著書を数々発表している。すでに、日本語に訳された同氏の著作『日本文学の歴史』は全18巻にも及ぶ膨大なものであるが、そのなかでキーンは、「日本近代文学」の特徴について以下のように紹介している。

日本の近代は、一般に、1868年の明治維新が出発点とされている。……電信機械を操作したり、鉄道や印刷機械の動かし方に関する知識を会得するのは、日本人にとって比較的やすかったが、外国語を習って、外国文学を鑑賞し翻訳するのは大事業だった。諸外国へ送り出された日本の留学生は、科学、農学、公衆衛生学等々、政府がさしあたって、実益あり、と考えた分野の学問のみに専念した。偶然に助けられない限りは、外国文学に目を向けることはなかった。(キーン 1984=1995、pp.11-12)²

近代化以前の日本においては、近代のシステムが、社会的にも文化的にも、まだ導入されていなかったゆえ、「文学」そのものがまだ発見されていなかったといえる。さらにキーンは、明治維新時の「文学の発見」について以下のように述べている。

明治以降の作家の多くは、欧米の作品の翻訳を読むことによってはじめて文学に目を開かされた。明治維新からの百年間に日本で行われた翻訳は、膨大な量に上る。……日本人の読者の中に翻訳が占める比率も、おそらく他のどの国民より高いが、かといって、それは日本独自の伝統の放棄を意味しない。むしろ逆に、日本の文学は、明治初頭から何度も日本的伝統への「回帰」を示したし、個々の作家についても、はじめは欧米の文学や文明全般に陶醉しながら、やがて同じような回帰を演じ、和魂洋才まではいかなくとも、東と西が自己の内面で不可分の結合を果たしたという認識に達した人が少なくない。(同、p.16)

つまり、日本人は、翻訳文学を読むことにより、日本における「文学」の価値を発見するに至ったのである。さらに、それが、日本的思想や日本的描写を取り入れた「和魂洋才」の小説が発達したことで、日本に「近代文学」という概念が生まれたのだと同氏は指摘している。ここでは特に、明治時代に「文学」の概念が発明され、そのきっかけとなったのが、翻訳文学であったことに注目したい。そしてそれは、本研究において、「翻訳」という視点から、明治時代の女性文学を論じている理由のひとつであることを強調しておきたい。

2. フランスから見た明治日本文学研究

フランスにおける、日本文学研究者の言説について、簡単に振り返ってみると、そこに明治時代の文学における翻訳や女性文学の重要性を指摘する記述はあまり見られない。フランスでは、まず、ルネ・シフェール (René Sieffert) の日本文学批評、ならびに、仏語翻訳の著作が膨大にある。そして、同氏

の著書は、日本の古代から近世にかけての物が多いのが特徴であるが、近代についての著作を見ても、ここで取り上げようとしている女性作家やその作品に関するものは見当たらない。さらに、近年フランスにおいても、先に述べたような、ポストコロニアリズム、フェミニズムの視点からの文学史の見直しも、多くの分野でなされている。しかし、日本文学論においては、その見直し作業は広く行われてはいない。例えば、2002年に発表された、ジャン・ギラム (Jean Guillamud) の「日本文学の歴史」では、奈良時代から平成文学に至るまでの、約2000年にわたる日本の文学史が紹介されている。この著書において同氏は、明治時代の文学は、まず、近代以前の江戸時代などの近世文化の伝統を引き継ぎつつ、新たな文化が形成されたとしている。そして、その上に新たな西洋文化という要素が加わったことにより、明治時代の文化が形成されたとし、以下のように述べている。

新しい社会がある種の混乱の中から始まった20年後、文学は創造の道を歩み始めた。そこにおける西洋文学の翻訳は、この再発見と無関係ではない。国策としての近代化における融合は、新たな想像の空間を作り出した。(Guillamud 2002, p.74)

ここでいう、文化の「融合」とは、日本が西洋文学を翻訳によりその文化の中に取り入れ始めたことを意味しているが、その功績のあった作家として、ロシア文学の翻訳家であった二葉亭四迷や、ドイツ語や英語の文学を翻訳し、またその思想を取り入れた小説を多く発表した森鷗外などについて紹介している。そして、その文学の特徴づけをすべて男性作家の作品を通して行っていることは、フランスにおける典型的な日本文学の受容のされかたを表しているといえよう。

一方で、フランスにおいても、こうした伝統的な視座とは別の角度から日本文学を見ようとする動きが起こっている。例えば、それは、日本近代文学批評家でパリ第7大学教授、セシル・サカイ (Cécile Sakai) の、「日本の大衆文学」の前書きに見ることが出来る。同書でサカイは、日本の近代文学（とくに大正から昭和にかけて）における「大衆文化」の重要性について、「日本の近代文学の知られざる一面、しかしながらきわめて重要な側面」である、と述べている。確かに、前出のドナルド・キーンの大衆日本文学史にしても、日本の文芸批評家である柄谷行人の日本近代文学の批評にしても、「大衆文学」に関する記述はさほど多くなく、それを重要な文学ジャンルとは捉えていない。しかし、サカイは、このジャンルを日本近代文学の「重要な側面」と位置づけており、このジャンルについて以下のように述べている。

大衆文学の作品は、何よりもまず、理論に無関心な一読者に向けられたものであり、メタ文学的な言説とは無関係に、読者に与える直接的なインパクト、無媒介の快楽によってのみ価値があると見られてきたからである。(サカイ 1987=1997, p.11)

それにもかかわらずサカイが、「大衆文学」批評をしているのは、先にあげたような「転倒」の視点からであろう。「大衆」あるいは、「マス」が、これまで文化的価値が認められていなかったように、本研究で取り上げる「女性」や「翻訳」の文学というジャンルは、それまでの価値観では批評に値しなかったのである。しかし、先にあげたような「脱構築」の視座を更に広げてみることで、そこには我々

がこれまで当たり前のこととして見逃してきたものが別の意味を持って、創出されるのである。

3. 翻訳学の歴史と確立——ベヌーティとトランスレーション・スタディーズ

前出のドナルド・キーンによれば、日本において翻訳文学が不可欠なものとされていたのは明治10年代（1880から90年代）であり、その後その中心は、西鶴など日本の伝統文学に対する関心へと移っていったという。そして、時代が進み1970年代になって、日本文学が新たな方向性を求めた際、世界の文学評論の世界をにぎわせていたのが、ポストモダニズムやポストコロニアルといった、「伝統的価値の転換」であり、そこで日本文学は、再び伝統的な文学価値の転倒に向かって動き始めたのである。

それでは、その世界で起こっていた「伝統価値を転倒」させるポストコロニアル文学理論とはどんなものであったのか、ここでその代表的な言説を紹介しておきたい。なぜなら、本研究で取り上げる「明治女性翻訳文学」とは、この価値の転倒により再評価されはじめた分野であり、本論を21世紀に入ってから論じている意味もそこにある。ここでは、その広範にわたるさまざまな言説の中から、特に、本研究の議論の展開を助けるであろう、イタリアの文学評論家、ローランス・ベヌーティ (Lawrence Venuti) と、同じ立場を、比較文学（あるいはカルチュラル・スタディーズ）の立場から論じる、イギリスの文学評論家、スーザン・バスネット (Susan Bassnett) らの考えについて紹介したい。そして、日本で明治時代に盛んに論じられた「翻訳論」が、その後の変遷を経て、確立した学問分野に発展した過程を確認しておきたい。

4. ポストコロニアル文学とベヌーティの翻訳理論

ローランス・ベヌーティは、2000年に *Translation Studies Reader* を編纂しているが、ここで彼は、この理論の歴史の変遷について述べている。本論では、特に日本以外の文化圏での翻訳学の確立の過程を見ることで、日本における翻訳学が、今後さらに学術分野として確立していくためのモデルを示したい。そしてそれは、日本が多くの場合、他文化の模写や翻訳を行いながら、それを、日本独自のものとして発展させてきたように、日本独自の翻訳学の成立を促すものとなるであろう。

ベヌーティは、これまで、さまざまな方法で翻訳の理論や実践について論じてきたが、この著書の冒頭で、彼自身の「翻訳学」に関する考えを以下のように定義している。

20世紀の翻訳理論は、近代文学の分野や分析法がより広範になったことを明らかにしている。それは、言語学、文学理論、哲学だけでなく、翻訳家の訓練や翻訳の実践にまで及んでいる。(Venuti 2000, p.4)

ベヌーティが言うように、20世紀後半において、「翻訳」は、これまでのような、単にひとつの言語で書かれたテキストを別の言語に移し変えるという、「実践」的な意味を超えた役割を果たすようになった。また、ここでわかるように、日本以外でも、「翻訳」は、その文学の歴史、そして、その発展

を通してひとつの役割を果たしてきたのである。特に、ベヌーティは、ヨーロッパの文学を中心にした翻訳学の歴史について説明しているが、それは決して地球の裏側の、異なる文化圏で起こったことだけではなく、それと同じことが当時の日本における翻訳文学の世界にも大いに当てはまる、ということに注目すべきであろう。

5. ヴァルター・ベンヤミンの翻訳性理論 (1900 - 30)

さらに、ベヌーティは翻訳理論の初期段階(1900-1930)の例として、ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin)の言説を紹介している。ベンヤミンは、翻訳学とは、「その翻訳によって伝えられるメッセージを伝えるだけに価値があるのではない」として、次のように述べている。

翻訳は、原作の翻訳可能性のゆえに、原作と極めて密接に関連する。どこかこの関連性は、もはや原作自体にとってはまったく意味がないだけに、かえって密接の度をくわえている。それは自然な関連、もっと正確には生の関連といえようか。生の表出が、生者にはいささかの意味もなくとも、生者と密接きわまる関連を持っているように、翻訳は、原作から出現してくる。たしかに、原作の生から、というよりはむしろ、その<死後の生>(Überleben)からだけれども。(ベンヤミン 2000=2003、p.72)

ここで、ベンヤミンが、翻訳とはオリジナルテキストの「死後」の世界であるとしている点に注目したい。さらに、同じくドイツの文芸評論家、パンヴィッツ(Rudolf Panwitz 1880-1957)は、翻訳を「外国語をとおして、翻訳家が、自分の言語を広めたり深めたりする文学的実践である」としている。つまり、これらのドイツ人哲学者にとって、翻訳とは、外国で書かれたオリジナルテキストをいかに忠実にドイツ語に訳すかといったような技術的、実践的なものではなく、むしろ、その外国語のテキストによって、(ドイツの)言語や文学に、広がりを与え、深みを増すためのものである、としている。そしてそれは、明治時代に日本で行われていた「翻案」に通じるものであり、それが、すでに当時のドイツ文学界で一定の評価を受けていたことは注目すべきである。

さらに先にあげたベンヤミンの「翻訳者の課題」では、「翻案」による文学的価値が、さまざまな角度から論じられている。そこで彼が提唱しているのが、翻訳によって生まれる新たな価値を意味するところの「翻訳可能性」である。これは、現代においても翻訳学を論じる際に用いられる、翻訳学における重要な特徴のひとつであるが、ベンヤミンはそれを次のように定義している。

翻訳はひとつの形式である。そう把握すると、原作に立ち戻ることが重要になる。というのも、翻訳の法則は原作の内部に、原作の翻訳可能性として包含されているのだから。……翻訳可能性のある種の作品には本質的に付随している——ということは、その翻訳が作品自体にとって本質的だということではない。そうではなくて、原作に内在しているある特定の意義が、その翻訳可能性において表出されるということ、あの命題はいおうとしている。明らかに翻訳は、どんなに良い翻訳であっても、原作にとってはいささかの意味も持ち得ない。にもかかわらず翻訳は、原作の翻訳可能性のゆえに、原作と極めて密接に関連する。どこか、この関連性は、もはや原作自体にとつ

てはまったく意味がないだけに、かえって密接の度をくわえている。それは、自然な関連、もっと正確には生の関連といえようか。(同、p.72)

ここでベンヤミンが指摘しているように、「翻訳可能性」の価値はそのオリジナルとの関係で決まるのではない。その価値は翻訳とその周辺（文化、社会）との関係（結びつき）によって決まるのである。それを説明するべく、この後、ベンヤミンは、「生」について述べているが、その価値を決定づけるものは、その生の「性質」ではなく、その生の「歴史」によって決定づけられる、と述べている。ここでも「翻訳可能性」の価値を決定づける要素となる「歴史的翻訳論」の展開について、もう少し述べておきたい。

6. ローマン・ヤコブソンによる翻訳論（1940 - 50）

1940-50年代における翻訳学においては、たとえば、1950年代に流行した、「ラディカル・トランスレーション」といわれる、文化人類学と地理学の分野にまたがる理論が論じられ、これまでの文学や哲学とは離れた分野で、翻訳理論が見られるようになる。そして、この時期には、学際的な研究が始まり、それにより、翻訳学も広がりを見せている。もちろんこの時期にも、文学批評家や哲学者、そして特に、言語学者による翻訳論が論じられた。そのなかでも、ロシアの言語学者ローマン・ヤコブソン（Roman Jakobson）は、セマティック（意味的）翻訳性について論じている。ヤコブソンは、翻訳とは、外国語のメッセージを伝達するだけでなく、むしろそれを変換するものであるとし、異なる記号システムへの「創造的置き換え」であるとしている。としている。さらにヤコブソンは、翻訳を次の3つのカテゴリーに分け、その特性について以下のように論じている。

- 1) 言語内翻訳、すなわち、言い換え rewording は、ことばの記号を同じ言語の他の記号で解釈することである。
- 2) 言語間翻訳、すなわち、本来の翻訳 translation は、ことばの記号を他の言語で解釈することである。
- 3) 記号法間翻訳 intersemiotic translation すなわち、移し換え transmutation は、ことばの記号を言葉でない記号によって解釈することである。(ヤコブソン 1963=1973、pp.57-58)

ここでみられるように、ヤコブソンは、翻訳を一義的でないものと捉え、翻訳の外向性の特徴について、次のように述べている。

翻訳者は、別の情報源から得たメッセージを再びコード化し、伝送する。こうして、翻訳は、二つの異なったコードによる、二つの等価のメッセージを含むのである。(同、p.58)

これは、ヤコブソンが、言語活動を二つのカテゴリーに分ける際（対象言語とメタ言語）の特徴づけが、翻訳にも当てはまる、と考えているゆえである。つまり、ヤコブソンは、翻訳とは、言葉はそれ自体として存在するのではなく、「メタ」の部分とともに存在する、と考えていることが窺える。それは、

次の言説にも表れている。

認知的機能においては、言語は文法体系に最小限に依存する。なぜならば、われわれの経験の限定は、メタ言語的操作と相補的な関係にあるからである、——つまり言語の認知的レベルは、再コード化するなわち翻訳を容認するだけでなく、直接必要とする言葉に言い表せない、もしくは翻訳不可能な認知的データを想定することは、名辞の矛盾となろう。(同、p.62)

さらにヤコブソンは、この翻訳の問題をジェンダー論と結びつけて論じている。特に、ヤコブソンは、母語であるロシア語におけるジェンダーの問題に注目しているが、例えば彼は、ロシア語と他のスラブ語における名詞の性の差異と、そこから生じるシンボルの差は、「翻訳不可能性」を意味する、として次のように述べている。

単なる形式的なものとしてしばしば掲げられる文法的性のような範疇でさえ、一言語共同体の神話的態度においては、大きな役割を果たす。……スラブ文学においてそもそもの誕生期に生じた最初の問題は、なんであったか。おもしろいことには、文法的性の象徴性を保存することについての翻訳者にとっての困難と、この困難の認知的な無関与とが、最古のスラブ語のオリジナルな作品、ミサ用福音書抄録の最初の翻訳に付せられた序文の主な内容のように見えるのである。……ギリシア語は他の言語に翻訳されると、必ずしも同一に再現されえない、そしてこのことは翻訳されるどの言語にも起こることである。(同、pp.63-64)

それゆえ、ヤコブソンは、母語であるロシア語の文法的性を通して、翻訳性と不可能性を認識する。さらに、むしろ、翻訳不可能性によって、文学の新たな創造性に気づいていることが見て取れる。つまり、文化や言語の異なる際に行われる翻訳とは、言葉を変えるだけの「翻訳」なのではなく、別の言葉で別の意味を作る「翻案」なのである。つづけて、ヤコブソンは、日本の明治時代に盛んに論じられた「翻案」の「意味を加えて訳す」という翻訳手法について、次のように述べている。

詩の翻訳は、定義上、不可能である。ひとつの詩型から他の詩型への言語内転移であれ、また、一言語から他言語への言語間転移であれ、また、あるいは最後に、言葉の芸術から音楽、舞踏、映画、絵画への、ひとつの記号体系から他の記号体系への記号法間転移であれ、可能なのはただ創造的な転移だけである。(同、p.64)

こうして、ヤコブソンは、翻訳不可能性に直面した際の「内的転換（あるいは内的翻訳性）」つまり、ひとつの詩形から別の形へあるいは、「間転換（あるいは間翻訳性）」つまり、ひとつのサインシステムから別の形へ、という「創作的置き換え」（つまり翻案）を行う必要があり、その価値を認めることで、翻訳不可能性から脱却しようとしているのである。これは既に日本語の翻訳の際にも論じられていることである。つまり翻訳という作業は、メッセージを伝達するだけでなく、そのオリジナルテキストの価値を、別の言語や文化圏で新たに作り出すことなのである。そして、それは、ヤコブソンの言う「意味論」と「翻訳学」をあわせて考えることで、より明確に翻訳の目的となって現れてくる。これは、日

本語と欧米語の翻訳の場合には避けて通れない問題であり、この価値をロシアの意味論を論じる言語学者であるヤコブソンが論じていることは、翻訳論の包括する広がり考えた際に、注目しておくべき過程であるといえよう。

7. 比較文学からトランスレーション・スタディーズへ（1980年代以降）

翻訳学は、この1970年代に、従属的な学術理論から、主要な学術分野へと発展していったといえる。この時代以降、北米の大学を中心に「翻訳」がひとつの学問として確立され、様々な学者たちが、さらに、多様な翻訳論を論じ、多くの翻訳理論書が出版されるようになった。その中心的な人物が、アメリカの大学教授であり、文芸理論家であるアンドレ・ルフェヴェール（Andre Lefevere）とスーザン・バスネットである。まず、ルフェヴェールは、この時代の早い時期から、翻訳の「書き換え」の特徴に注目している。これは、ポストコロニアル文学が現れた際にその価値が重要視された、文学的特徴であるが、彼の翻訳論の特徴を、先出のベヌーティは以下のようにまとめている。

ルフェヴェールは、翻訳批評や歴史誌学を、「屈折」または「書換え」と見なしている。1998年に彼が書いたところによれば、「屈折」は、文学をあるシステムから、もうひとつのシステムへと移し変えることで、詩学、イデオロギーによって決定される。この解釈的枠組みは、対象の文学に、新しい規範や伝統を与えるものである。ルフェヴェールは、この著者の独創性についてのロマン派的な考えは、翻訳を周縁化させるものだとしている。(Venuti 2000, p.218)

さらに、ベヌーティは、こうした彼の翻訳学に関する考えは、フランスの哲学者ジャック・デリダの論じる脱構築（デコンストラクション）の理論に通じていることを指摘している。

翻訳は、外国語のテキストを、わかりやすく伝えるものでは決してない。……ポスト構造主義の出現によってようやく、言語の多義性が認識され、翻訳は、外国語のテキストの移し変えとしてだけでなく、ジャック・デリダのいう「デコンストラクション」のような、疑問を投げかけるものとして捉えられるようになった。(Ibid., p.218)

こうして、翻訳学他の分野と共通した特徴を論じるルフェヴェールの翻訳に対する考え方は、間言語、間文化の差異を生み出すだけでなく、その間言語や間文化そのものの概念の中に、ある種の言語や文化、文学を生み出すものであることを指摘している。これはさらに、スチュアート・ホール (Stuart Hall 1932-)、ガヤトリ・スピヴァック (Gayatri Chakravorty Spivak 1942-)、ホミ・K・バーバ (Homi K. Bhabha 1949-)、などの、ポストコロニアル理論家たちの論じる翻訳理論へと踏襲されていく。

さらに、ベヌーティは、バスネットの著作 *Translation Studies* が、大学の授業で使われるようになったことで、この分野の発展に大きく貢献したとしている。さらに、それが後の学術分野における翻訳学の確立に繋がった点を指摘している。

スーザン・バスネットの *Translation Studies* は、翻訳学が、独立した学問となったことを知らし

めたと同時に、それが言語学、文学批評、哲学の要素を含み、間文化的なコミュニケーションについての独自の問題を掘り下げるものだとしている。バスネットは、理論的枠組みについて、歴史的 analysisを行うと同時に、文化や社会状況の関係について、実践的な手法で紹介している。(Ibid., p.215)

そうしたバスネットが論じる、包括的な翻訳理論の中でも、特に彼女が重要視しているのは、比較文学が翻訳学に取って代わっていることである。もともと、比較文学とは、ヨーロッパ、特にフランスで始まった学問であるが、カルチャル・スタディーズの広がりを受けて、主に英語圏を中心として盛んに論じられるようになった。そして、文学の面で中心的分野となっていた比較文学が、この時代には翻訳学に取って代わろうとしていたことを彼女は指摘している。それは、かつて、比較文学が文化の間に存在することに価値を見出していたように、翻訳の価値は、翻訳された言語内での文学的価値によって評価されるのではなく、その間に存在すること、そして、そこで新たな文化圏を創造することであることを指摘している。

翻訳は、移し変えの行為として認識されている。翻訳は、文化的交換の基本的な役割と見なされている。そして、翻訳により、元になるテキストの文化との関係から、その翻訳している文化について多くのことを学ぶことが出来る。今日論じられている女性学、ポストコロニアル理論、カルチャル・スタディーズにおける間文化的研究は、文学研究と見なされる。われわれは、翻訳学を中心的な学問と見なすべきであるが、比較文学は、補助的な分野となっている。(Bassnett 1993, pp.160-161)

この時代、カルチャル・スタディーズや比較文学に取って代わった翻訳学は、これまでの時代よりも、より文学分野に近い形で論じられるようになる。そしてそれがこの次の時代のポストコロニアル文学において論じられることにより、一定の学術分野としての確固たる地位を得たのである。こうして来てきたように、日本の明治時代に論じられ始めた翻訳理論は、その議論の中心を、哲学→言語学→文学→カルチャル・スタディーズ→ポストコロニアリズム、とシフトしながら、広範囲に及ぶ分野を確保し、一つの学術分野としての地位を確保するにいたったのである³。現代では更に、様々な学術分野での議論の中心は、ポストコロニアルの後に、グローバリゼーションへとシフトしつつあるが、ひとつの学術分野としての地位を築いてきた翻訳学においても、今後そうした議論が必要とされてくるであろう事は容易に予想される。そして、更に今後、学術分野において、論じられるであろう、現代文化の特徴としては、例えばそれは、インターネットなどの発達による、メディアに関連した領域であることも十分にありえるであろう。

ゆえに、翻訳学は、トランスレーション・スタディーズののち、さらに多元的な分野へと発展していくことが予想される。また、本研究では、明治時代におけるメディアの発達と翻訳性、女性性について触れることになるが、それは、明治時代の頃に論じられ始めた翻訳学が、21世紀の視点へシフトしていく上で、本論に用いられているような論理的展開が可能であることを示そうとしているためでもあるのである。

8. 翻訳学の視座と明治女性翻訳文学の発見

ここで私が翻訳理論について述べたのは、こうした翻訳学の発展により、明治時代の文学を振り返った際に、当時、そしてとりわけ翻訳が急速に発展した時代には、その価値がはっきりと認められていなかった明治時代の女性翻訳家による作品からみられる当時の女性文化の様子がその翻訳作品にはっきりと刻まれている、ということを示したいためである。

それゆえ、本研究では、従来、明治時代の翻訳文学を論じる際に、その分析対象となる、森鷗外や坪内逍遙のような男性作家たちの既に広く語られている翻訳作品についてではなく、同時代に翻訳文学を通して、外国における女性たちのあり方を盛んに論じていたにもかかわらず、それをひとつの文学としてこれまで論じられることのなかった女性作家たちについて、その文学の存在とその価値を知らしめることを目的としている。その対象となる作家としては、『小公子』の「翻案」で知られる若松賤子、ロシア語文学の翻訳に尽力した瀬沼夏葉、ドイツ語等の文学を翻訳した大塚楠緒子、森鷗外の妹であり、兄の影響が強く見られる小金井喜美子などであり、その翻訳作品と、その影響で描かれた文学作品についての分析を行っている。そして、本論でその歴史を振り返りながら強調してきたように、翻訳とは決して単に一つの表現を別の言葉に置き換えるだけのものではなく、それはその作業以上の役割を果たしているのであることを、これらの女性作家の作品分析を通して明らかにしたいと考えている。これらの女性作家たちの作品における翻訳の役割は、日本人が外国文学を翻訳し始めた明治時代にすでに存在していたのであること、そして、その価値がないがしろにされてきたことを本研究は指摘しようとしているのである。それと同時に、明治時代の女性翻訳家たちの言説もまた、単なる「言葉の移し変えの作業」とみなされることで、ないがしろにされてきた。しかしながら、そこには、彼女たちが語ることの出来なかった、当時の女性の生き様が克明に刻まれているのである。明治時代には男性作家と違い、多くの女性たちは、その思いを語るためのすべを持つことが出来なかったが、彼女たちの行った翻訳を、別の視点から文化資料として見直すことで、当時の女性たちのさまざまな考え方が、生き生きと浮かび上がってくるものとなる。それゆえ、本研究で展開している明治時代の女性の思想と女性翻訳家の作品分析は、これまで知り得なかった日本の女性の生と性さらには、彼女たちの生きた社会、創った文化を、別の面からみることを、可能ならしめているのである。

(やまで・ゆうこ／お茶の水女子大学ジェンダー研究センター研究機関研究員)

注

- 1 ここでは、ポストコロニアル理論以降の、トランスレーション・スタディーズの影響を受けた翻訳理論を「トランスレーション理論」としている。それは例えば、吉村正和氏がカルチュラル・スタディーズの観点から、翻訳学を論じた自身の論文のタイトルを『トランスレーション言説研究』としているのと同じ立場である。
- 2 英語、仏語文献で、参考文献に邦訳の記載のないものは、著者による翻訳である。
- 3 日本における明治時代以降の翻訳論については、例えば谷崎潤一郎の『文章讀本』(1934)などにその思想を見ることができる。

参考文献

- Barthes, Roland. *Le degré zéro de l'écriture suivi de Nouveaux essais critiques*. Paris: Éditions du Seuil, 1972.
- Bassnett, Susan. *Comparative Literature: A Critical Introduction*. London: Blackwell, 1993.
- Bassnett, Susan. *Translation Studies*. London and New York: Methuen, 1987.
- Benjamin, Walter. "La tâche du traducteur." *Œuvre I*. Paris: Gallimard, 2000. (ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の課題」『ベンヤミンの仕事1 暴力批判論 他十篇』野村修訳、岩波文庫、2003年)。
- Guillamud, Jean. *Histoire de la littérature japonaise*. Paris: ellipses, 2002.
- Jakobson, Roman. "Aspects linguistiques de la traduction." *Essais de linguistique générale 1: Les fondations du langage*. Paris: Les éditions de minuit, 1963. (ローマン・ヤコブソン「翻訳の言語学的側面について」『一般言語学』川村茂雄監修、みすず書房、1973年)。
- Keene, Donald. *Dawn to the West: Japanese Literature in the Modern Era, Fiction*. New York: Henry Holt and Company, 1984. (ドナルド・キーン『日本文学の歴史』徳岡孝夫訳、第10巻、近代、現代篇 1、中央公論社、1995年)。
- Sakai, Cécile. *Histoire de la littérature populaire japonaise: faits et perspectives (1900-1980)*. Paris: Éditions L'Harmattan, 1987. (セシル・サカイ『日本の大衆文学』朝比奈弘治訳、平凡社、1997年)。
- Venuti, Lawrence. *Translation Studies Reader*. NY: Routledge, 2000.
- 吉村正和「トランスレーション言説研究——意味の等価を超えて——」(平成17-18年 科学研究費補助金 基盤研究(C) 報告)。<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/socho/mirai/mirai-yoshimura.pdf>

